自立援助ホーム「いっぽ」訪問記

朋編集部　中日青葉学園 わかば館長　寺井 陽一
知多学園 美桜の杜（旧松籟荘）施設長　佐々木 仁美
中日青葉学園 あおば館 児童指導員　長谷川 惠

はじめに

愛知県（名古屋市を除く）には、「いっぽ」「Stay Alive 1、2」「のぞみ」「ぴあ・かもみーる」という5つの自立援助ホームがあります。＝2022（令和4）年4月現在。その他、1施設休止中。そのうちの1つ、春日井市の「いっぽ」を訪問し、井上陽子施設長にお話をお聞きしました。

きっかけ

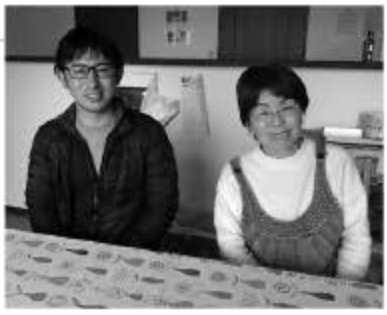
井上さんが自立援助ホームを始めようと思ったきっかけ

私は、2006（平成18）年、子どもたちのためにやれることをやってきたという満足感、達成感をもって、小学校教諭を退職しました。退職後、社会的養護の子どもたちと出会って、衝撃を受けました。教員時代に出会うことがなかった被虐待・社会的養護の子どもたち。本当は出会うことがなかったのではなく、見逃してきたのではなかったか…。教育現場でやりきれなかったこと見逃してきたことをまだやれると思い2012（平成24）年から里親を始めました。

里親を始めたころは、自立援助ホームの存在を知りませんでした。里子の1人が措置解除となり、その後の委託先として児童相談所が探してくれたのが自立援助ホームでした。見学をさせていただいたり、スタッフの方の話を聞いたりして、こういう場所が必要だと感じました。当時愛知県内（名古屋市を除く）には自立援助ホームは2カ所ほどしかありませんでした。いろいろ調べるなかで、これは自分たちでも作れると思い、2015（平成27）年、里親仲間や当事者、大学の研究者などと一緒に「つくる会」を発足、月に1回程度集まり、勉強会を重ねました。幾つかの自立援助ホームへの見学や場所探しに奔走、2016（平成28）年「いっぽ」を立ち上げました。

「いっぽ」の成り立ち

2015（平成27）年10月	自立援助ホームを「つくる会」発足
2016（平成28）年９月	春日井市坂下町に「いっぽ」開設
2019（平成31）年２月	春日井市浅山町に移転
2021（令和３）年10月	春日井市六軒屋町に　ステップハウス「jump」開設



施設長の井上陽子さん（右）と
ホーム長の青木祐磨さん（左）

Q. 開始時から満床でしたか？
A. 徐々にではありましたが常に打診があり、ニーズはあるなと感じていました。枠が空くと誰かが入ってくる感じでした。
Q. 移った理由は？
A. 耐震の関係と狭さです。ずっと満床で、打診を断ることもたびたび。断った子どもたちはどうなっていくのかという心苦しさがあり、もう少し広いところに移って枠を広げるべきではないかと話し合いました。同時にスタッフの力量アップの必要性を感じ、週に1回定例のスタッフ会を開くようになり、現在も続けています。

現状

「いっぽ」の現状

定員……男子8人。16歳～21歳の子どもが生活している。
学校……普通科、工業科、特別支援、通信、昼間定時、専修
仕事……コンビニ、スーパー、居酒屋など

アルバイトをしながら通信制や定時制の高校に通う子どもが多いです。しかし、アルバイトも学校も続かない子も少なくありません。入所者からは一律3万円の寮費（食費、部屋代、光熱費）を徴収しています。働くことが困難な子は、一時保護費や生活保護費で負担してもらい、児童相談所からは一般生活費として1人単価1～5万円ほど支給されます。

現在、常勤が3人、非常勤が6人、宿直勤務が10人、ボランティア1人、合計20人のスタッフで運営しています。チームワークはばっちりです。

今後

今後の見通し、展開

18歳、22歳で委託措置が切れます。いざ自立となっても、うまくいかず、生活保護を受ける子もいます。療育手帳や発達障害など精神障害者手帳を持っていて自立が困難なためグループホームに入所し事業所に通う子もいます。しかし、入所者の多くは、一般就労して1人暮らしをスタートさせたいと思っています。

そこで、いっぽ退所後、さらに自立のために必要な力（食事作り、金銭管理、身の回りの管理）をつけるための場所として、ステップハウス「jump」の自主運営を始めました。いっぽスタッフのサポートを受けながら、いっぽに実家のように気軽に顔を出しながら自立を目指す…。子どもたちの明るい未来を夢みながらこれからも試行錯誤を続けていきます。